喜多 ①

人の優しさが身に浸みて秋、
慈しみ深い人々の澄んだ瞳に出逢う。

The Roman
of Kitakata

Tenderness 慈悲のように

晩秋の陽だまりのなか、秋桜にそっと寄り添われるように、静かに座っておられる石仏に出逢った。長く厳しい冬を迎えるまえの、束の間の小春日和の午後である。そのお顔があまりにも優しく穏やかに感じられ、しみじみと心やすまる思いがしてくるのは何故だろうかと考える。

厳しい自然風土のなかで生きる喜多方の人々の素朴で温かな素顔が、そのまま石仏のお顔に表れているようにも思える。喜多方の人々の多くはみな働き者である。男たちも女たちも、朝早くから夜遅くまでよく働く。子供たちは屈託のない笑顔を誰にでも気軽に投げかけて来る。東北人の特質である勤勉な性格と素朴でおおらかな心情を、例外なく喜多方の人々は持ち合わせていると感じる。

慈愛に満ちた石仏のお顔はまた、どこか遠い祖父や祖母たちの顔を思い起こさせる。深く刻まれた額のしわ、柔和で優しい眼差しにあふれた、あの懐しくも逞しかった祖父や祖母たち。ふるさと喜多方の歴史をつくり、喜多方独自の文化を築き上げてきた偉大な先達たちであった。陰りはじめた秋の陽の中で、石仏たちは一瞬、微笑まれたかのように見えた。